

留学生における日本語学習の諸問題 —中国語を母語とする学習者を中心に—

竹 田 治 美
Takeda Harumi

1 はじめに

本稿の目的は留学生の日本語学習の習得過程における諸問題を分析し、その結果に基づいて、中級レベル学習者に日本語を習得させるための方法を探ることである。

今回接した日本語学習者は主に中国語を母語とするものであり、日本語能力試験2級合格者である。また、ほとんどの学習者は2年間以上日本語を学習し、生活やアルバイトでの生活言語能力（BICS）支障がない程度のものだと思われる。その中には、中国の特定地域で中学、高校でも日本語を第3言語として6年間学習経験したことのある学生も存在する。

本学に在学する留学生において、全員日本語能力試験2級合格者であるにも関わらず、学習言語能力（CALP）においては大きな差が見られる。中には大学の授業に支障をもたらす留学生も存在すると思われる¹⁾。

ここでの日本語中級レベルはJLPT（Japanese Language Proficiency Test）の基準によるものである。いわゆる、やや高度の文法・漢字（1,000字程度）・語彙（6,000語程度）を習得し、一般的なことがらについて、会話ができ、読み書きできる能力を持ち、また、600時間程度学習し、中級コース修了したレベルである。

本学の留学生の日本語科目は第二外国語科目として開講している。一回生においては日本語Ⅰ（語彙・解読）と日本語Ⅱ（作文）があり、二回生からは文章表現を重視して指導する。また、日本事情などの科目も必修科目として開講している。

これらの講義は、特定の教材を使用せず、大学のシラバスに沿って、いくつかの教材を参考してそれぞれのクラスと学生の進度に合わせたものを用いる。

中級レベルの学習者においては、共通の問題点として、初級的な誤用が多く、文法の間違い、助詞・助動詞の誤用、イ形容詞・ナ形容詞の誤用、自動詞・他動詞の混同・誤用、日中同形語彙の誤用などの問題点が目立つ。その中、特に中国語を母語とする学習者による日中両国に共通して存在する漢字表現、いわゆる日中同形類義語と同形異義語からの混同・誤用が顕著に見られる。

本稿では、学習者との授業実践を通して、日本語講義中、作文、宿題などによく見られる誤用例²⁾を収集し、また、中国語を母語とする学習者が混乱をきたしやすい特有の誤文を取り上げ、これらの問題に焦点を絞って分析・考察を加えて行きたい。これらの誤用は学習者の日本語学習において避けることができないものであると考える。

2 日本語学習の諸問題について

中級レベルの留学生でも日本語学習の問題に関しては、初級的な文法の誤りが多い。

その原因として、初級的な学習において、語彙の意味・用法、基本的な語法習得が十分には指導されていないと考えられる。また、口語学習に偏重した学習の傾向も見られる。その上、日本語の文法は複雑であり、短時間で系統的な学習は難しいであろうと思われる。

また、日本語能力試験に対する短期間の試験対策中心の学習であるため、基本的な文法学習が重視されていない傾向も考えられる。

特に、中国語を母語とする学習者には、日本語学習について、漢字表現という共通点がある。したがって、日本語学習は容易であるという先入観がある。漢字使用に慣れている中国人の日本語学習における優位性は指摘するまでもない。しかし、中国語は日本語と違い、「孤立語」であるため、動詞や形容詞、助詞などの活用がなく、受給表現・待遇表現・受身形と使役形も比較的容易である。これらの複数の要因から誤用が生じると考えられる。

以下、日本語学習において共通の問題をとりあげて、分析して考察する。

2-1 文法の誤用

・助詞「の」

中国語では、形容詞と動詞が名詞を修飾する場合に日本語の「の」に当たる「的」をつける。例えば「非常贵的电脑」（非常に高いパソコン）、「买来的晚饭」（買った晚饭）のような使い方は一般的である。これを日本語に単純に置き換えて「非常に高いのパソコン」、「買ったの晚饭」のような誤用例がしばしば見られる。特に会話以外、長文の中の誤用が多い。

例えば、

* 今までの研究によれば、今回の経済危機によって倒産するの会社が数えることができない。

* 回収した廃棄物を再利用するの技術だ。

* 我が国でも、出生率が低いのような問題があり、深刻化しつつある。

これらの用例では、中国語の「倒产的的公司」、「利用的技术」、「出生率低的问题」の「的」をそのまま日本語の「の」に置き換えたものである。

以上の用例は、日本語作文の練習の一環として「文完成練習」である。「の」に関する誤用例は数多く、中級学習者では助詞の機能を十分に理解ができず、中国語の語法体系を維持したまま、日本語の表現にあてはめようとするものである。すなわち母語干渉によるものである。実際、誤用例を通して授業の改善を図ることに困難を感じる。また、助詞の誤用は助詞だけの問題ではなく、動詞・形容詞など、いくつかの要素と組み合わせられていることが多い。助詞のみの練習は効果が薄い。今後、収集された誤用例をデータ化し、その誤用に関する要因などをさらに考察して、個々の用例や文型について導入時の適切な説明を検討したい。

・イ形容詞とナ形容詞

日本語教育の現場では、「形容詞」のことを「イ形容詞」と呼び、「形容動詞」のことを「ナ形容詞」と呼ぶ。ほとんどの留学生は、「イ形容詞」と「ナ形容詞」が名詞を修飾する際、比較的問題が少ない。また、[感情形容詞]と「属性形容詞」を区別して、修飾語として意味上は正しく使うことができる。しかし、活用についてイ形容詞と

ナ形容詞の混同や誤用が多く見られる。

例えば、

*リサイクルとは、古いものを新しいに作りなおす方法のことだ。

*これは新しい買ったパソコン？

形容詞の活用は基本的な規定がある。しかし、中級レベルの学習者にとって、終止形・連体形・中止形・条件形・譲歩形について意味上理解が出来ても、実際使用する際、大変混乱に陥りやすい。また、感情形容詞から「～がる」という派生的な動詞をつくることができるが、1人称主語か、また3人称主語か、述語になることによって「～たい」、「～がる」働きが変わることが中級レベルの学習者には誤用が多い。「私は強くなりたい」を「私は強がりしたい」、「彼も食べたがっている」を「彼も食べたい」ような例文もしばしば見られる。

・自動詞と他動詞

学習者にとって困難を覚える項目は自・他動詞、意志・無意志動詞、瞬間動詞にまつわる概念と実用である。これらの動詞は、活用だけでなく、意味・用法の違いなども中級学習者にとって理解しにくいものである。自動詞とは目的語を取らない動詞のことである。他動詞とは目的語を取る動詞のことである。自動詞はある物自身が動きをする場合、動作を起こされた物の状態変化を能動形で表すときなどに用いる。他動詞は動作の対象となる目的語に対して関連動作を行う時に用いる。

例えば、

*彼は生まれながらの資質が備えている。

*必要な本は、図書館に備わっております。

これは穴埋め問題の練習での誤用例である。

指導法として代入練習・変形練習などを重視した練習、動詞をグループに分ける練習、同じ語根の自動詞・他動詞をセットにする練習、また、助詞や可能形・受身形・使役形同時に導入する方法も考えられる。考える人の視点からか、それとも、事柄に視点に置くのかという、物事の捉え方の違いを考えるべきである。

・日中同形語

日中同形語の数は非常に多い。日本が中国から借用した漢語と中国が日本から借用した漢語の両方が原因である。大まかに「同形同義語」、「同形類義語」、「同形異義語」に分類される。

「同形同義語」とは、共通の意味を持つので、日本語学習にプラスの要因として働くものである。

「同形類義語」とは、意味と用法の一部は共通するが他の意味内容を持つ同形語である。この種の語彙は広範囲に用いられている。

「同形異義語」とは、漢字の表現上では同様であるが、意味・用法の異なるものである。日中言語での異なる語彙の状況を明らかにすることは、学習者にとって非常に重要である。

例えば、

*今は、多種の言葉を覚えなければならない。

*そのため、いま習慣しなければならない。

*日本の社会や習慣について了解しました

*深刻な思い出が出来ると思います

*大学に入って勉強について不安している

以上のような日中同形語の意味や文法の機能の違いが原因となる誤用はしばしば見られる

日中同形語は、同一の漢字表現でありながらも、言語習慣、文化的な背景や社会制度の違いから、共通部分を持ちつつ微妙な相違点を有する。学習者は無意識で中国語の意味で理解してしまう傾向がある。その結果、日本語における正確な意味を把握できなくて、コミュニケーションギャップの要因になっている。今後、さらに学習者の誤用例をデータ化し、同形語の意味、分類などを検討して授業に導入したい。

3 日本語教育に対する今後の対応

上述の問題以外にも、次のような問題がある。文体の混合、例えば「です・ます」体と「である・だ」体の文体の混用も目立つ問題である。

また、主語と述語が対応しない誤用例が多く見られる。すなわち、主語が不明確、複数の主語が存在する。さらに重複した内容が多い。これらの問題による文の意味は理解しにくくなる。今後の対策として、長文より短文を繰り返し書く練習を重視する。さらに、語調の統一性に気をつける継続的な練習の指導が必要である。婉曲表現・曖昧表現・省略伝達などの言語習慣による表現の不可逆性に注意する。

上述の問題に対して2009年度の留学生に日本語強化講座を実施した。講義外の時間やe-ラーニングを使用し、留学生を対象に日本語基礎知識について補講を行った。

指導方法として留学生の要望に合わせた内容を重視し、個別・グループに分けて指導を行った。また、インターネットのチャットを利用し、自宅での指導も行った。補講の内容は中級テキストに沿って語彙、文法、表現の練習などがあり、基本を重視する。

カリキュラムは以下のようなものである。

期間 クラス	指導内容	到達目標
三ヶ月	基本文型・構文 基本自動詞・他動詞 接続詞の練習 助詞の練習	文法・構文の修得 動詞・形容詞の活用 既習文型の応用、表現力の増加 複文・長文の理解
六ヶ月	上級漢字、語彙の練習 副詞の練習 慣用表現 複雑な構文の強化	書き言葉と話し言葉の区別を理解する 作文能力の強化
九ヶ月	新聞などを読む 語彙の増加 長文の読解	自分の意見が正確に表現できる 微妙な表現を理解する 大学の講義が理解できる

一年	スピーチ・討論の練習 小論文・レポートの練習 レジュメの書き方 資料の収集方法	高レベルの読解力・文章力の養成
----	--	-----------------

今後、課外補講や日本語能力試験対策をさらに改善・充実し、効率的な学習方法を考えていきたい。

4 おわりに

以上、中級学習者に共通する問題を取り上げて考察した。大学の日本語教育は一年間で効率よい授業が求められている。特にレポートなどの書く訓練、今後学習者のニーズに応じる教材・講義、応用型、高レベルの日本語能力の強化が必要である。

こうした背景において、大学講義における必要な日本語力の強化を視野に入れる必要がある。日本語教員だけではなく、学科、大学全体で取り組むべき課題であり、協調して共通した授業内容をつくる必要がある。

また、カリキュラムの強化、日本語能力試験への対策、教材、副教材の完備、課外補講、個別補講など多方面の努力が緊要である。

共通講義以外、きめ細かい学習サポート体制の確立が必要であり、学習、大学生活に対しても重要な役割と果たすと考えられる。さらに、言語の背景にある生活習慣、日本社会や日本文化について、授業や日本人学生、地域との交流などさまざまな経験を通して学ぶことが大切である。

留学生を受け入れる上で、本学の特色のある留学生体制を確立し、留学生の生活、学習状況を把握したうえで、本学における日本語教育を充実する必要がある。

注

1) BICS：生活言語能力 Basic Interpersonal Communicative Skills

CALP：学習言語能力 Cognitive Academic Language Proficiency

2) 本稿で取り上げた誤用例は、本学の留学生の作文の授業における文型の練習・宿題から採用した。添削・コメントして返却し、再度教員側に提出したものである。本稿に使用するに当たって学生の了解を得ている。

参考資料

寺村秀夫 1991 日本語のシンタクスと意味 I・II・III くろしお出版

高橋太郎 2005 日本語の文法 ひつじ書房

藤田昌志 2007 日中対照表現論 白帝社